

吹田市 佐井寺風土記こぼれ話(六)最終回 編集部

大阪市の水源地と佐井寺

今から五十年前(大正二年頃 編集部注)のこと、
どういう風の吹き回しか、丘陵の起伏する草深い、
この佐井寺村へ白羽の矢が立てられたのであろうか。
大阪府からの委嘱で、この佐井寺へ調査に来られた、
担当技師の名を沢井と云った。
その技師の助手として、田中さん他二名が雇われた
が、以下の記述は、田中さんのお話と、私の感想とを
記したものである。

沢井さんはこの丘陵地を、約二ヶ月に渉って実測さ
れたところ、水源地として適地であると認められ、地
蔵塚を中心とした、周囲十二町がそれに必要である。
そこで余剰の水は全部、農耕用に提供することを条件
として、買取交渉を始めたところ、小作の人々は双手
を挙げて賛成してくれなかった。
というのは、当時の日給の相場は二十銭であったが、
もしもこの工事に雇って貰うと、四十銭が労賃として
支払われるというのである。ところがそうなるに困る
のは地主達ということになる。そのため最後まで、地
主達の容れるところとならず、話は挫折していった。
その技師沢井さんの話によれば、水は淀川からでは

料水としての適不適を論議され、もはや供給の限界点
に近づきつゝあることを思う時、腰抜けどもの多かつ
た当時の為政者達が、沢井さんの案を用いてくれてい
たなら地盤の沈下其他水に関する諸問題は、ある程度
は緩和されて、かくも問題になって居らなかつたらう
に：：と思うにつけて、取りかえしのつかないこと、
悔やまれてならない。

これをただ老人の練りごとなどは、思われたくな
い。
沢井さんの遠大な、百年後の阪神地区の発展を見抜
いての、卓見が挫折したために、第二案の柴島が選定
採用されたものであるとか。

安寿山に土器を拾う

今から三年前の夏の直昼時、吹高の清田先生と、小
径も判らぬ身丈程の雑草を、かき分け、案内の田中さ
んについて安寿山に登った、この山は山という程でも
なく、丘と云っておいた方が適切である。

ところが須恵器の破片が、いくらかでも転がっている、
当時は大桃畑であったが、破片の色も形状も釈迦ヶ
池北岸の、昇り窯跡から出たものとよく似ている。

地形も南面した登り窯築造には、最適の傾斜地であ
ることは判ったが、小地主群の土地柄だけに、発掘調
査には相当の困難性が伴い、役所への調査依頼の運動

なく、遠く琵琶湖からの用水路を作って、直接に湖水
を引き入れ、これを地蔵塚から大阪城の天守台へ送り、
それから大阪市内へ配水するという遠大な計画であつ
た。この工事の見積もりは、百万円と計上されたそう
である。今の金に換算すれば大したものである。あ
る日の昼餉時に技師が、休憩場所の愛宕山から大阪城
を測量したと判明。天守台よりも当山の方が、十二尺
も高いことが判明した。以て当佐井寺の高い地域であ
ることが立証されたことになる。

其時に技師は「百年の後には大阪と神戸とは、必ず
一体になる：：と言明されたそうである。

日毎に殖えていく工場、ビル等々、無軌道振りな地
下水汲み上げによる、地盤沈下を防止するため、地下
水に代わる工業用水の確保利用、阪神間諸都市一体化
より更に飛躍した、兵庫・大阪・京都・滋賀・福井嶺
南・三重・奈良・和歌山をも含めた、近畿広域圏化、
各高速道路新設と立体化、等々しきりに昨今の新聞を
賑わしている現況を思うとき、五十年前も以前に、
助手の田中さんに語られた、先見の明ある言葉には、
只々頭の下がるのみ。

当時の為政者にして見れば、沢井さん提案の設計図
は、「余りにも夢物語に等しいもの：：くらいにしか
感じて居らず、誰もが耳を籍さなかつたのではあるま
いか。

近頃の柴島水源地附近の汚染度も甚しく、府民の飲

も差し控えてあつた訳である。ここで私達がなぜここ
へ登ってきたかを、簡単に述べておこう。
今から数十年前にさかのぼる、田中さんら当時の若
者達数十名が、此の丘を開墾したところ、須恵器の破
片がぞくぞくと出てきて、非常に開墾工事の邪魔にな
り、ために開墾も捗らないで困つたらしく、中には形
状の整つたものも若干出て、各人が保存したけれど、
永い年月の間に無関心さも手伝って、邪魔もの扱い視
され、いつとはなしに、姿を消してしまつたというの
が実情らしい。

ところが僅かの間に、土地造成ブームの余波が、こ
こら当たりにもまでも進入し、昨秋よりブルドーザによ
り崩し始めた。気にはかけて居つたが、一昨年来神経
痛に冒され、両手足の悪く不自由なため、現場へゆく
ことがつい延び延びになっていった。

昨年十月末のある日、「窯跡が二ヶ所も出た」との
ことを耳にしたので驚き、足の痛みをこらえて登つて
みると、以前から私の気に懸けて居つた、こちらから
見えない場所で、丘の中腹迄削りとりられて了つてあ
るのに、地団駄踏んだが、あとの祭りでどうにもならな
い。

黒灰層の跡らしいところが、一尺(約三〇センチ)程
残つてあつたので、早速と一塊を掴みだし、角のある
所でコツンコツンと当てると、思いがけない程完全に
近い、食器の蓋らしいものが転び出たときは、たとえ

様のない嬉しさであった。

かつて私が睨んで居ったことには、間違いのなかったことが、これで立証された事になる。

二ヶ所も窯跡が出たと言葉は、私の調査で破壊された後であることが判った。役所へ届け出て土取り作業中止の申請も不要になった。

第二回目に行った時には、稍完全に近い、小壺らしい形状のものを拾った。

これも須恵器であるが、まだ完成されたものでなく素焼きに近いもので、もう一度加工して、更に高温度にかけて、仕上げる過程の土器であるらしい。

一昨年七月六日有志十数名と、釈迦ヶ池北岸へ赴き、京都大学考古学教室の、横山浩一教授から聴いた話では此所からの出土品は、千数百年前に朝鮮民族が大挙渡来し、ロクロを使つての須恵器の、制作にいそしんだもので、弥生式土器製法とは、比較にならない程度歩したものであった。

温度も千数百度の熱に上る、地形をうまく利用した登り窯を造り、当時としては技術的大革新で、幼稚な技術の持ち主であった日本人をして、目を瞠らせたことであろう。

或人は曰く「此の作品は（私の拾つた品）数百年前位に焼かれたものである……」と。

蔵塚」等々一連の丘陵は何れも、抹香臭い名称ばかりではあるが、私としてはいたく興味を唆らしめられ、こゝろの和む地名ばかりである。（三八・五・一〇）

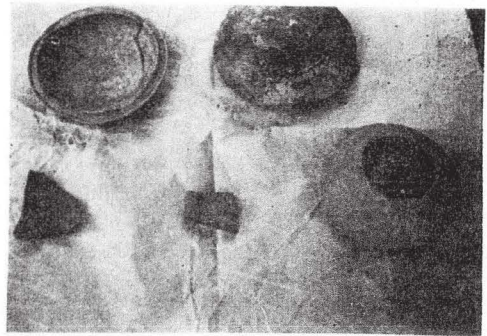
この項も重複の箇所のあるところをお詫びする。

寺下の八右エ門

かつての山田寺は、傑僧行基の開創と称えられ、碓井寺ともいって僧坊六十余の堂宇を数えた。草堂ながら当時としては豪壮であったに違いないが、長の年月と、度重なる戦乱の余波を受けて灰尽となり、今日の山田寺は当時の一塔頭（たちちゆう）であった。一度は愛宕山へ上っていたとせば当時の規模の如何に巨大なものであったかぞ窺える。

「寺下の八右エ門」とは、当山田寺の下の方に住んで居られたので、かくは呼び名をされた。

或朝のこと、八右エ門の家人が、門先に人品卑しからぬ落人らしい、武人が佇つて居るのに気がつき、不審に思つて其の理由を尋ねたところ、「先ず食事を与えられたい……と請う。次で「今は世を憚る故、安全な場所へ隠して欲しい……この要請があつたので、食事が終わるやすぐに納屋へ隠し、家人らはその前で平常通りの縄ない草履造り等をしてカムフラージュした。



図は安寿山で拾ったものである。

この方面にあまり知識を持たない私には、何も判らないが、このように当佐井寺も古くから人々が、交流していることを物語るものであり、考古学上に於ても、民俗学的見地からも、何らかの研究課題を残してくれていることに、判らない乍らにも大関心と、希望と悦びとが私の胸を去来している。

題名の「安寿山」隣りの「万陀羅山」右隣りの「地

やがて夕刻になつたけれど、追手の来る様子もなく、落人は家人らに丁寧に礼を述べ、「そのお礼の証（しるし）に何か所望があれば遠慮なく申し出るように……」との言葉に応え、最近当村へ落人及び強請（ゆすり）などの悪どろが、頻りに出没し、各家々を脅やかして困り居る旨訴えると快諾、早速と一筆を認めて立ち去つた。

其のうしろ姿には御光が射しておつたとか。この一札のお陰で爾來、諸々の輩の出入りがなくなり、悩みの種子がスツカリと消え去り、以後村人達はこの落人（家康か）を徳として、ながく慕っていたとか。

貴重なこの文書（もんじよ）は後日山田寺へ奉納したが、以後いつの間やら行方不明となり、種々な噂や口伝に残っている。或いは某家に保存されているとかの話は耳にするが、果たしてどこ迄が真実であるかは判らない。

当時落人に与えた御飯は麦飯であつたので「麦飯の八右エ門」として今に口伝に残っている。まことにあたゝかいユーモアに富んだ伝説として残っていることは、それだけこの土地の古さを物語っている、貴重な証拠の一コマで実在がたい。

「註」当時の農民は殆ど全部と云つてもいゝ程、つい三四十年前迄は麦の混ぜたものを常食として居つた、故に身体は健康で脚気などに罹る若者を見なかつたが、最近では食生活が変わつたので、脚気にかゝる若者

も若干はあるらしい。(三八・五・九)

山田の荘と覚応寺について

山田の荘とは佐井寺も含めた広大な土地のことで、その佐井寺の民家には、旧幕時代から明治初年頃にかけて、堺の覚応寺を上寺(うわでら)としていたものが六七十軒もあった。

同時の住職は戦国時代の頃、四国の一地頭であったが、いづれの頃よりか、堺に住む様になり、後、本願寺の法主に帰依し、その後一寺の住職となり、布教に明け暮れて居ったところ、戦火に罹り其の混乱の際「南無阿弥陀仏」と書いた御本尊、一名御神名様(こしんめいさま)と称えたものを紛失してしまった。

落胆した和尚は、方々を訪ねめぐんだが挫けず、「もしや」と思い直し、当時十軒ばかりあった大阪の、古道具屋を訪ね回ったところ、或る日一軒の古道具屋の主人から、去る日撰洲山田の荘のお方が買って下さった、との言葉に力を得て遙々と探し求め、山田の荘、即ち今の佐井寺村へ、ようやく辿り着いて尋ねたところ、その買主は山田氏と判り(其の姓は現在でも続いている)和尚は同家を尋ね、一ぶ始終を物語ったところ、主人は非常に感激し、無償にてこれを手渡された。

これが当佐井寺村民との、つながりが出来た始まり

になり、収入も殖えれば元氣も出て、楽しみも増してくる。

昼日中の農作業も終え、夕餉にくつろぐ間も惜しく、隣近所の夫妻、若人、娘さん達が、各々の家に集まり遅くまでの作業をつづけ、つい競争心まで手伝って、少しでも沢山に能率を上げようと励む、けれど四方山の話に冗談を交えての作業故に、疲れもあまりにこたえないらしい。

嬉しいさみやきもあつたであろう、やがて花も咲かせて実も結んだことであろう。

だがそんな甘いことや、嬉しいことばかりではない、「縄ない」は楽しそうに見えるがそんな生やさしいものではない、少し精を出すすと両掌の皮が薄くなり、血がにじみ出て来る。二三日休んでうす皮が出来ると、又作業を続ける重労働となり、楽しいどころではない。

「うちの娘を佐井寺へは嫁にやりたくない、縄ないをさせるのは可哀想じゃ…」他村の親御達にしてみれば、そう云われるのも無理はない、他所から嫁に来られた人達は、馴れないから人知れぬ苦しみもあつた。幾日かの楽しい盆正月の敷入りも済ませて、婚家近くに戻ってくる、あちらこちらの家の内からの人声や、縄ないの音が耳に入り、またまた辛い思いを、繰り返すことのやるせなさに、涙を絞った人達も随分と多かつたらしい。

けれども時は移り、機械なえになつてからは、副業

である。その僧の徳を慕うたものか、忽ちにして六十軒が、上寺として仰いだものらしい。

当今ではもう其の様な話は聞かない、それから永い年月が経つとともに、寺とのつながりも、いつとはなしに疎遠となり、噂も消えていったのである。

この伝説は信仰と結びついた我々の、生活に身近な感を興えてくれている。

なかなか興味のある、深く私の心を捉えた一挿話として、永久に残しておきたいものゝ一つである。

(三八・六・十八)

歌人野謝野晶子氏と同寛氏、この覚応寺の前々々の住職とは、じつ懇の間柄で二人して、屢々この寺を訪れていたそうであることを偶然なところから耳にした。

(四〇・四)

縄ない

全国の各農家では副業として、身近にある藁こそは、無尽蔵に等しい好資源、と言っても言い過ぎではあるまい、土地土地に適したわら工品として生産に励み、各農家の生計を支える、重大な役割を果していると思える。

わが佐井寺の各農家に於ても、いつの頃よりか縄ないを始めた、段々と馴れるに従って能率も上がるよう

としての生業(なりはい)も漸次少くなり、さしもの殷盛を極めた縄なう人達も、何時とはなしに消えてしまひ、内々喜んだ人もあり、嘆いた人々もあつたであろう。

而し副業としては相当な収入になり、少なからぬ産をなした人もあるように聞いている。

さて其の賃金はどんなものであつたであろうか、材料の藁は他から買うとすれば、一束(いっそく)(といえはわら十六把(ば)で一括り)で、二銭から二銭五厘が相場であつた。これは四五十年前の相場である。

縄の長さは十二間(けん)(約二十二メートル)に、なえたものが一把(いちわ)という。それを十把寄せたものを一束という。この賃金が上等で十六銭、中等十三銭、下が十二銭くらいで、其の等級の差は、丁寧に仕上がったものを上等とする。

これをよくする人は、一日に三束くらいは仕上げる。わら代を差し引いても、四十銭前後の収入といえは、当時とすれば随分と良い副業といえる。

縄がない上がると、それをよりかけ車にかけてから、縄のヒゲを焼いてみがく。それを一縄(こすり)という。

(三八・五・二六)

「銀板の墓誌銘」―出土品の発見者

大和・榊原氏宅訪問記（和仁儀一氏口述）

昭和三十五年三月十日付、大阪毎日新聞に、大和国天理市岩屋在榊原獅（たかし）氏所有の山地（敷）から、「佐井寺僧道楽氏の骨壺」とその中に収められてあった「銀板の墓誌銘」とが発見されたことは、全国学界でも珍しい出土品である。と宣伝されていることを、四月中旬の丑（牛）の祈禱の日に、山田寺住職谷光倫師より、その旨語られたので五月麦秋の頃何心なく訪ねたい気持ちで起り、腰弁で九時頃に我が家を出立、近鉄に乗り天理駅に下車して、先ず天理教本社殿を礼拝した。（中略）

ある日当若主人が敷を掘り返して居ったところ、石に当たったので、其の石蓋を取り除くと、方形の石で囲まれてあり、その中の小石を取り除くと、素焼きの骨壺が見つかり、驚いて家に帰り父に告げると、半信半疑の態たらく、誰かの墓地ではないか、等々思い乍ら現場へ戻り、恐る恐る蓋を開けると光るものがあり、それを拾い上げてみると、銀板一葉の裏と表に、毛彫りした墓誌銘であった。この地方では「その様なものが出る」と、家に不祥事が起こる……との言い伝えがあるため、元の通りに収めて内密にしておいた。ところがふとしたところから漏れて人から人へと伝わり、他所からの道具屋さんが見え、ごく内密で譲り

て居なかつたが、墓誌銘と骨壺の出土により、千二百五十年前の和銅年間に、たとえ草堂の類であつたとしても、六十余坊も存在して居たことには間違いないらしく思われる。墓誌銘の道楽師は、当佐井寺で修行された僧か、それとも名僧で当寺へ招かれ、一山の僧の指導的役割を、果たしておられたのではなからうか。

この墓誌銘のお陰で今迄曖昧模糊とした観念から拭い去られ、甕を並べて威容を誇っていたことが窺われる。

当時の新聞（毎日）に依ると、和銅七年（七一四）は奈良遷都後五年目、発見の年から数えて一千二百四十五年前である。此の様に葬者の墓に、姓名、生前の略歴等を刻んだ墓誌は、銅板、金銅板、銅壺、瓦等に刻んだものが、全国で十四例出されているが、銀製のものはこれが初めてで、しかも文中の「佐井寺」は奈良時代の寺院名に出て来ず、「大檀」の姓も姓氏録にもなく、資料上からも大きな研究課題とされ、考古学界からも注目されている。云々（三八・六・一〇）

吹田市御在住の史学御専攻の諸先生、史実や、市の古文化財保存に関心の深い方々、吹田市のためになお詳しく御研究、御教示垂れ給わんことを乞う。

（三九・一一・一）

受けた旨、執拗に食い下がられ、「当方も災いの種を無くするためにも……」とつい釣り込まれて、手放す気持ちで湧いて一度は手放したもののらしい。

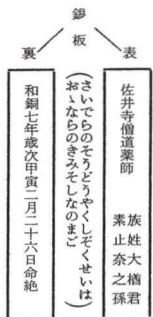
やや時を経て、県の古文化財保存委員会？の、人達の知るところとなったことを、古道具屋さんが逸早く耳にし、榊原氏のもとへ返還に来たので、ことの重大性を察知し、早速と元のところに収蔵した。これで噂の第三国人の手にも渡らずに済んだことは何よりの俾せであった。（中略）

「出土品は只今東京へ運ばれ、学者仲間の研究資料となっており、（中略）」

「実は先日来県下一円に、佐井の付いている四十数ヶ所の地名を尋ね歩いたが、何一つ確証を得ることが出来ず、ガツカリして居る時に誰云うとなしに、「佐井寺の廃寺は河内方面にある……」との噂を耳にしたが、それが撰津にありましたか……」と半信半疑の様子に見受けられたが、私の持参した、佐井寺観音由来書と同村史とを見るに及んで漸う納得されたりしく（以上和仁氏口述終り）

この墓誌銘と骨壺は、目下奈良国立博物館に陳列されており、過日、山田寺の谷光倫住職が訪れ、骨壺の前で懇ろな回向をされた。

私も今迄は、行基開祖の由緒ある古い寺であることは判っていた。また伝説と事実と、半々位にししか信じ



（骨壺）「高さ二〇センチ 胴張二六センチ、口径一四センチ（蓋付きの須置器）
（銀板）「長さ一三・五センチ、幅二・三センチ 厚さ二ミリ（銀の延べ板）」

今回をもちまして貴重な郷土の記録である藤井久義氏著「吹田市佐井寺風土記ごぼれ話」の連載を終わらせて頂きます。本稿を発掘、ご提供頂き、数々のご助言を頂きました十五回生伊藤發子様に改めて感謝の意を表します。

最後までご愛読頂きました会員の皆様、ありがとうございます。編集部